

自然の物語に導かれて

文 中上紀
Nakagami Nori

画 浅妻健司

亡父の故郷が和歌山であるため、子供の頃から彼の地の海や川、山などの自然に親しんできた。いま、自然から生まれた伝説や伝承に、心を寄せている。

例えば、日高町の「道成寺」に伝わる二つの伝説。一つは、藤原宮子の物語。一説に彼女はかつて海女の娘で、なぜか髪が生えなかったという。だがある時母親が海の中から光り輝く観音像を拾い上げて以来、髪が伸びはじめ、ついに身の丈よりも長くなった。やがて旅の途中の文武天皇に見初められ、藤原不比等の養女となって入内に至ったという「髪長姫」の伝説が信じられている。もう一つの伝説は、有名な「安珍清姫」だ。清姫が大蛇と化し、安珍を追いかける情念の強さは恐ろしいほどである。両方の伝説の舞台となる紀州の自然、川や海も、決して平たんではなく、激しい。そして美しい。強い女性そのものである。

さて、清姫は恋の炎で安珍を焼き殺したが、火といえば、新宮の御燈祭りが思い出される。新宮は、亡父の生まれ育った町である。年に何度か、家族全員引き連れて、新宮の祖父母の家にいき、長々と滞在するのが常だった。2月6日の御燈祭りに、父が幼い弟を伴って上った時のことも覚えている。

のように流れていくので、新宮では昔から、山は火の滝下り龍、とうたわれてきた。この祭りによって、あらゆるものをそぎ落とし、人々は再び生まれ、新しい年を生きていく。

さて、子供の頃、新宮で不思議に思っていた場所に、浮島の森がある。

街中に、異色な空気を醸し出すようにぼつんと在る浮島の森は、足を踏み入れるとずぶりと沈んでしまう心もとない地面によって湖に浮かぶように構成されている島である。暖かい地方と寒い地方の植物が混在する珍しい生態系があったり、洪水の時も沈まず浮かんでいたりと、現在も多分に謎めいている場所だが、かつては両親から一人で近づいてはならないと、たびたび脅された。

浮島には、貧しい少女が弁当の箸を忘れて木を手折った罪で、大蛇に穴に引き込まれたという伝説がある。たしかに、夜ともなれば、大蛇のみならず様々な魍魎が潜んでいそうなほど鬱蒼と暗い。また、浮島の奥には、終戦の頃まで遊郭があったという。島の不思議と、女性たちの悲哀が、いつしか伝説を作り出したのかもしれないとも思う。

那智勝浦町の那智湾に面した集合住宅に父が仕事場を定めたのは、私が9歳か10歳の頃である。以来、和歌山に来る時の家族の拠点はそこになる。

那智山は熊野三山の一つであり、那智の滝をこ神体にあたり、那智大社がある。那智湾には、那智の滝が川となって注ぎ込んでいる。この海には、

1400年続く御燈祭りの舞台となるのは、神倉神社が祀られている神倉山だ。この山の中腹に、カエルが伏せたような形に見えることからゴトビキ岩と呼ばれる岩がある。祭りの日、白装束に身を包んだ2000人も男性が、538段の石段を上り、この岩の周りに集まる。皆、手には松明を持っており、そこにご神火をいただいて、開門の合図とともに、山を駆け下りる。祭りの期間中、山は女人禁制だ。山の神様は女で、この祭り自体が男女の契りだからである。ただ、女たちは白装束を纏った男たちの食事や振る舞い酒の準備をし、さらには、山から下りてくる男たちを、麓で待ち受ける。男と女、双方がいて成り立つ祭りなのである。

ところで、祭りでは、古来の鍛冶職が鉞を奉納する。これは神武天皇が地形の荒々しい紀伊半島に分け入り、高倉下命の援助により布都御魂剣を手に入れ、大熊あるいは毒気を吐いて抵抗する女酋長「ニシキトベ」を倒したとされる伝説によるものだ。神倉山で、男神は鉄を以て母系社会を制することで、男系中央集権社会の祖を築いた。そのバランスのために鉄の源である火を祀っているとも映る。

遠くから見ると、神倉山の肌を、松明の火が滝

昔、補陀落渡海という行があった。僧が自らをわずかな食料や水と一緒に小さな船に閉じ込め、常世の国を目指して船出するという行である。観音菩薩の浄土が、水平線の向こうにあると信じられていた。平安時代にはじまり、江戸時代中期ごろまで、何人も僧が渡海した。渡海して生き延び、琉球にたどり着いた僧もいると聞くが、基本的に死と背中合わせの旅である。それでも船出したいと思わせるほど、神々しく雄大な自然だということだろう。

現在も、我が家の那智の部屋は、ほぼ当時のまま残されている。時折私も、家族の誰かしらを伴って滞在するが、ここに来ると、なぜか夜明け前に目覚めてしまう。空が白み始めた頃、ベランダに出て、海を眺める。朝日が昇り始めると、海面も、後ろの空も、燃えるような色になる。赤々と輝く紀伊の海には、魔術的な力を感じる。水平線の向こうへ行った者ですら現れてくる気さえする。水平線の反対側には、那智山が聳え、滝が白い衣を纏った女性のように艶めかしい光を放っている。そこから、物語の聲が聞こえる気がする。

ながみ・のり 作家の中上健次、紀和鏡の長女として、1971年東京都に生まれる。ハワイ大学美術学部美術史科卒業。1999年、『彼女のプレнка』ですばる文学賞受賞。主な著書に『いつか物語になるまで』『熊野物語』『天狗の回路』など。

